

第二言語発達における慣用表現力

Formulaic Competence in Second Language Development

田中茂範

Shigenori TANAKA

慶應義塾大学

Keio University

Abstract

A language has been traditionally viewed as a set of lexicon together with a grammar. However, the adequacy of this view has been questioned. Pawley and Syder (1983) point out that this lexicon-plus-grammar view misses the formulaic nature of language. A language is a composite of free expressions and formulas (Jespersen, 1933). Free expressions are rule-based: Expressions are freely produced according to a set of grammatical rules. In contrast, formulas are convention-based: Formulaic expressions are recursively used as chunks (also called “ready-made expressions,” or “prefabricated routines”). In the context of second language teaching, Lewis (1993) proposes that formulas are taken as pragmatically useful lexical items or “large vocabularies.” In recent years, the advantages of formulaic sequences have been discussed in the field of second language development in terms of processing advantages and manipulation of information (Wray, 2000). However, most language learners do not yet enjoy the benefits of formulaicity (Wray, 2000; Yorio, 1980). This paper addresses the issue of how to learn formulas to develop formulaic competence, arguing the need for distinguishing the stock view and the flow view. We also argue that the large-vocabulary view (Lewis, 1993) should be elaborated with the concept “formulaic network.”

Keywords

Formulaic Sequences in SLA, Stock View, Flow View, Formulaic Network

1. はじめに

どんな言語にも非常にたくさんの慣用表現というものがある。認知言語学の枠内で、Taylor(2004)は、言語の慣用性を重視し、この慣用化された言語をどう扱うかが「言語＝語彙＋文法」観のアキレス腱であると述べている。慣用表現とは、慣用的に使われる定型表現のことであり、その言語を話す人が共通に使う表現のことをいう。例えば「さようなら」や「すみません」は日本語において典型的な慣用表現である。慣用表現は、理屈を考えずに、当たり前に使っているもので、何かを言う際に、何ら負荷がかからない表現だといえる。例

えば、日本語で「すみません」を使う際に、「なぜ『すみません』と言うのか」を考えたりしない。語源的には「心が澄んだ状態でいられない」に関係があるという説があるが、私たちは、「すみません」という決まり文句を「謝罪」の場面だけでなく、「感謝」の気持ちを表すときや、さらには「相手の注意を喚起するとき」などにごく自然に使っている。「すみません」は1つの表現に過ぎないが、それが日本語を使う場面で果たす役割の大きさははかりしれない。

デンマーク出身の言語学者イエスペルセン (Otto Jespersen [1860-1943]) は、言語には慣習と創造の2つの側面があり、「慣習」は“*How do you do?*”のような“*formulas*”と、そして「創造」は“*I gave the boy a lump of sugar.*” (“*give* + 名詞 + 名詞”の1事例) のような“*free expressions*”と結びつくと述べている (Jespersen, 1933, p. 18)。これは言語のありようをうまく言い当てた表現である。われわれは、ここで *free expressions* を「自由表現」、*formulas* を「慣用表現」と呼びたい。自由表現は、必要に応じてその都度文法に従って作り出される表現のことをいう。一方、慣用表現は、多くの人々が繰り返し使うことで表現が定型化したものをいう。

第二言語習得(発達)の研究において、慣用表現——“*formulaic sequences*” (Wray, 2000) と呼ばれることが多い——の研究が進められている (Conklin & Schmitt, 2008; Ellis, 2012; Jiang & Nebrasova, 2007; Lewis, 1993; Riggensbach, 1991; Schmitt, 2004; Wray, 2002)。例えば、Lewis (1993) は、英語の母語話者と第二言語の学習者の発話表現を比較し、第二言語学習者の発話は、文法的に何ら問題がなくても、意図が伝わりにくい(理解に時間がかかる)ものが多いということを指摘している。Conklin and Schmitt (2008) は、第二言語の学習者と母語話者を対象に、慣用表現を使った文章とそうでない文章のどちらが理解しやすいかを研究し、学習者にとっても母語話者にとっても同様に、慣用表現には「認知処理上の利点 (*processing advantage*)」が認められることを示している。

慣用表現の習得が第二言語習得の鍵である点は、研究者間で共有されていると考えてもよい。しかし、Ellis (2012) は、慣用表現は第二言語習得の促進要因であるにもかかわらず、学習者は母語話者のような慣用性 (*formulaicity*) をなかなか獲得できないと述べ、第二言語における慣用表現の習得のむずかしさを指摘している。確かに“*How are you?*”とか“*Give me a break.*”のような高頻度のもは覚えやすい。しかし、頻度が比較的低いものになると、途端にその学習はむずかしくなるし、まして、慣用表現を自在に使って円滑なやりとりをすると大いに難が残るとというのが Ellis の論点である。

第二言語教育の分野では、「*コミュニカティブ・アプローチ*」が主流になって久しい。このアプローチでは、文法シラバスというより、機能シラバス (*Why don't you ...?* などの慣用表現を重視したシラバス) を重視するところにその特徴がある。しかし、そういった指導法が実践されているにもかかわらず、学習者は慣用表現をうまく使いこなせていないというのが第二言語習得研究の知見である。つまり、慣用表現は重要であり、実際の指導でもその重要性は強調されているにもかかわらず、その習得はむずかしいということである。では、どうすれば慣用表現力を育てることができるか。これが本稿での主題である。

慣用表現は「定型文 (*formula*)」だとか「決まり文句 (*stock expression*)」あるいは「熟語 (*idiom*)」などと呼ばれ、その重要性はわかっているが、慣用表現の世界にどう接近しているかわからないという学習者が多いし、これは英語教師にとっても同じである。実際、大学

生に聞いてみると、その多くは、「熟語はそれが何であれ、覚えるしかない」と考えている。そして、共通している学習方法は、熟語帳を丸暗記するか、熟語が出てきたその都度、それを覚えていくというやり方で慣用表現を学んでいくかの2つである。その結果、多くの学習者は、折角覚えたものの、それをうまく使いこなせないと感じているのが実情である。研修会などを通して多くの英語教師と意見を交換する機会があるが、慣用表現の取り扱いについては、教師も学習者と全く同じ考え方を共有しており、「慣用表現の体系的な指導法」や「慣用表現力を鍛える」という発想はないというのが現状のようである。

筆者は、慣用表現力は、語彙力と文法力とともに言語資源(language resources)の3つの柱を構成すると考えている。そこで、語彙論と文法論と同様に、慣用表現論を展開することが必要である。上記の第二言語習得研究においても、formulas だとか formulaic sequences という言葉は使われ、その使用実態が研究の対象になっているが、「慣用表現力とは何であるか」についての理論的考察があるわけではない。そこで、慣用表現力を操作的に定義する必要があるというのが筆者の考えであり、本稿ではその構図を描いてみたい。以下、議論の展開として、(1) 慣用表現の種類(types of formulas), (2) ストックとしての慣用表現(the stock view of formulas), そして(3)フローとしての慣用表現(the flow view of formulas; formulaic sequences)の3つに注視した議論を行う。なお、ストックとしての慣用表現は、何をどう学べばよいかという問題に、そして、フローとしての慣用表現は、慣用表現力とは何かという問題に接続するものである。

2. 慣用表現の種類

まず、慣用表現の種類について見ていこう。慣用表現といっても、その守備範囲は大きく、茫漠としている。しかし、慣用表現を分類する枠組みがなければ、学習者は、方向性を持たないまま、慣用表現をランダムに覚えていくことになる。そこで、どういう分類基準が可能かということだが、実に多様な分類が提案されている(Aijmer, 1996)。筆者は、慣用表現の世界を大雑把に整理する観点として、以下が有効であると考えている。

- ① 機能表現(機能慣用チャンク) : Why don't you ...? (～したらどうですか), Could you ...?(～していただけますか), Don't forget to ... (～するのを忘れないように), You are supposed to ... (君は～することになっているはずだ), I agree to a certain point, but ... (あるところまでは賛成ですが、～)など。
- ② 丸ごと表現(丸ごと慣用チャンク) : Give me a break. (いい加減にしろよ), Here we go. (さあ、やるぞー), Forward march. (前へ進め), Way to go. (いいぞー), You must be kidding. (ご冗談でしょう), I did it. (やったー)など。
- ③ 文法構文表現(構文慣用チャンク) : had it not been for ... (もしあのとき～がなかったなら), nothing is more A than B (BほどAなものはない), it goes without saying that ... (～なのは言うまでもない), in such a way as to ... (～するような方法で)など。
- ④ 句動詞チャンク : take up (取り上げる), give off (臭いなどを発する), add up to ... (～に加える), put up with ... (～にへこたれない)など。

- ⑤ 副詞表現(副詞慣用チャンク) : in the end(最終的には), as a result(結果としては), in other words(言い換えれば), by and large(概して), to be more specific(もっと具体的に言うと), among other things(とりわけ)など。
- ⑥ 動詞表現(動詞慣用チャンク): beat around the bush(回りくどい表現をする), call a spade a spade(歯に衣着せぬ言い方をする), speak ill of… (～の悪口を言う)など。
- ⑦ 形容詞表現(形容詞慣用チャンク) : clean as a whistle(きれいでピカピカ), poor as a church mouse(とても貧しくて), silent as a clam(二枚貝のように口を閉ざして), quiet as a mouse(とても物静かで)など(a great deal ofや a slice of など数量に関する熟語もここに分類することができる)。
- ⑧ 前置詞表現(前置詞慣用チャンク) : with respect to… (～に関しては), in spite of… (～にもかかわらず), in terms of… (～については), in light of… (～に鑑みて)など。
- ⑨ 諺・箴言 : Too many cooks spoil the broth.(船頭多くして船山にのぼる), An early bird catches a worm.(早起きは三文の徳), You're barking up the wrong tree.(お門違いだ)など。

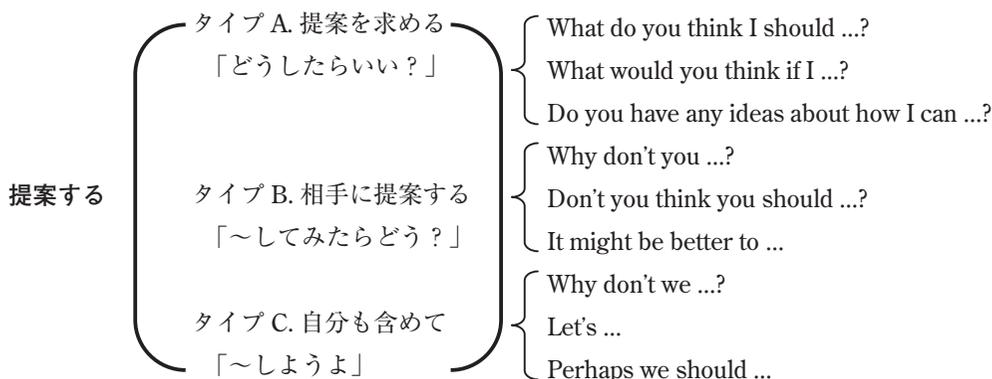
①の機能表現(functional expression)は「依頼する」「提案する」「紹介する」「念押しをする」など目的に対応する慣用表現のことをいい、これはコミュニケーション・アプローチの旗印の1つになっている。言語行為論(Austin, 1962)を踏まえ、広く教材にも取り入れられている。「～していただけないでしょうか」だとか「何と書いていいか…」といった表現(機能慣用チャンク)は、それぞれ「依頼する」「ためらいながらあることに返答する」という目的のために使うことのできる機能表現とみなすことができる。しかし、慣用表現は機能表現だけではない。ここでいう②の丸ごと慣用チャンクは、文字通り、日常的に耳にする丸ごとで使われる決まり文句のことをいう。「さようなら」や「すみません」は丸ごと表現である。③構文慣用チャンクは、文法書で慣用表現として扱われてきたものを指す。if it had not been for ...や had it not been for ... は仮定法過去完了の決まり文句として取り扱われている。

以上の3つに加え、④句動詞チャンク、⑤副詞慣用チャンク、⑥動詞慣用チャンク、⑦形容詞慣用チャンク、⑧前置詞慣用チャンクがある。これらは、品詞的な分類で、比較的区別しやすい慣用表現だといえよう。さらに、諺や箴言の類の表現も多数存在し、これも1つの独立した分類項だとみなすことができる。

3. ストックとしての慣用表現

慣用表現を上記の通りに分類しても、そのままではリストに過ぎない。学習上重要なのは、ただリストとして蓄えるのではなく、有意味なネットワークを作るということである。リストのままでは、単語の学習でいうならば、ちょうど「単語と意味の対応関係」が示されたに過ぎない。有意味な単語学習には複数の単語の意味のネットワークが必要なように、慣用表現においても同じことがいえる。すなわち、学習者は「慣用表現ネットワーク」を身に付けていく必要があるのである。ここでは、その具体例として、「提案する」に関する慣用表現を中心にして、

慣用表現ネットワークがどういうものかを例示してみたい(図1参照)。



提案に関する動詞 & 名詞

動詞：suggest, propose, advise

名詞：suggestion, proposal, advice, idea

提案タイプ B に関する関連表現

- ・相手の注意を喚起する：I'll tell you what., I've got something to tell you., Hey, listen.
- ・相手の反応を忖度しながら(提案に入る)：I don't know how you feel but ..., You may feel it absurd, but ..., I'm sure you like this idea.
- ・提案を実行するように促す：Go ahead., Try it., Give it a try.

図1 提案表現のネットワーク

まず「提案する」といっても、(A)相手に「どうしたらよいか」提案を求める、(B)相手に「～したらどうか」と提案する、そして、(C)一緒に「～しないか」と提案するという3つのタイプが考えられ、それに合った慣用表現を割り振ることでネットワークを作成することができる。しかし、それだけでは不十分である。なぜなら、例えば提案タイプ B の場合、いきなり「提案内容」を示すというより、「相手の注意を喚起」し、そして「相手の反応を忖度しながら」提案に入っていくのが普通だからである。また、相手に何かを提案するという場合、「～するのはどうですか。頑張ってやっごらん」と「後押しの言葉」も付け加えることがあるだろう。すなわち、「注意の喚起」「相手の反応の忖度」「提案内容」「実行を促す」に関する慣用表現をネットワーク化していくことが必要である。そして、そうしたネットワーク知識があれば、以下のような形で、何かを提案するという行為に一連の流れを作り出すことができる。

注意の喚起：Hey, listen. (ねえ、ちょっと)

相手の反応を忖度：Well, you may feel it absurd, (ちょっと馬鹿げていると思うかもしれないけど)

提案：but why don't you ask Naomi to lend you some money? (ナオミにお金を貸してくれと頼んでみたらどうか)

激励：Just give it a try. (やっごらんよ)

すなわち、慣用表現のストックのしかた次第で、慣用表現が使いやすくなるということである。もうひとつ例を見てみる。「驚き」や「感動」を表す際の表現も慣用化されたものがほとんどである。例えば「驚き」の間投詞といえば、Wow!, What?!, Gee!, Oh, my God!, Oh, dear! などが典型的である。感情をストレートに表現するのがこうした間投詞だといえる。日本人は表情が少ない(emotionless)だとか不可思議だ(enigmatic)と形容されることもあるようだが、驚きの間投詞を含む感情表現を実践の場で使うことも必要であろう。そこで、驚きの表現のストックを持っていることが求められるわけだが、ここでも以下のような感情表現ネットワークを作成すると表現力に繋がりがやすい(図2)。

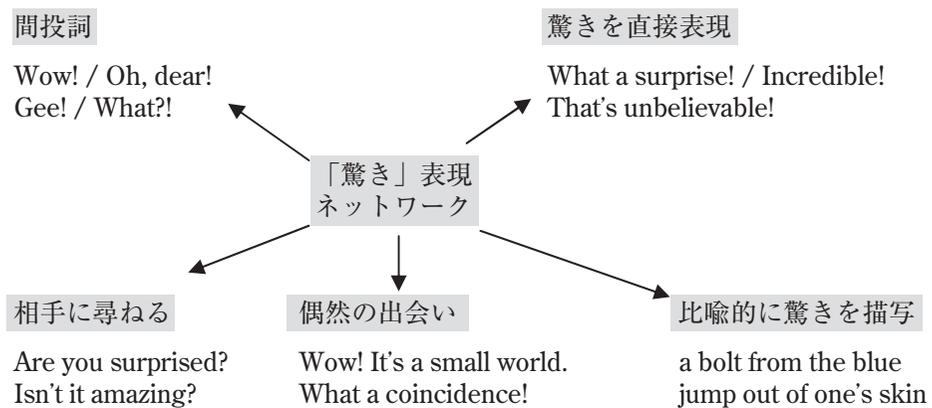


図2 感情表現(驚き)のネットワーク

簡単に説明する。びっくりしたときは日本語でも「わあ！ 驚いた」と言うが、英語でも驚きを直接表現するものとして **What a surprise!** を筆頭に以下のような決まり文句がある。

That's amazing. それは驚きだ / **Oh, I'm really surprised.** ああ、本当に驚いちゃった / **I'm shocked.** びっくりした / **This is a nice surprise.** うれしい驚きだね / **Incredible.** まさか / **That's unbelievable.** それって信じられない / **Unbelievable.** うそでしょう / **I can't believe it.** とてもじゃないけど、信じられない

相手を驚かせておいて「驚いた？」と問いかける状況も考えられるが、その場合は、次のような表現が典型的である。

Are you surprised? 驚いた？ / **Does that surprise you?** それ聞いてびっくりした？ / **Is this a surprise?** ねえ、驚きでしょう？ / **Isn't it amazing?** なんかすごくない？ / **Can you believe it?** それって信じられる？

また、同じ「驚く」といっても、旧友に予期せぬところで出会ったときの「世の中って狭い

ね」に当たるのは、Wow! It's a small world. である。What a coincidence! という言い方もある。We met again at an unexpected place. It's not just a coincidence. That must be a fate. だと「ぼくらは予期しない場所で再会した。それはただの偶然じゃない。きっと運命的な何かだ」という意味合いである。さらに、驚いたということを事後的に描写する際、比喩的な響きのする慣用チャンクもいろいろある。日本語に「晴天の霹靂」という言い方があるが、これに当たる英語は、a bolt from the blue あるいは out of the blue の2つである。何かが予期しないところで起こり、びっくりするという状況での表現だといえる。そこで、The chairman's resignation came as a bolt from the blue! は「会長の辞任は晴天の霹靂だった」ということだし、The fight started out of the blue. も「その喧嘩は突如起こった」ということである。驚くといっても自分の目を疑ってもう一度よく見るという状況があるが、英語では do a double take という言い方をする。He did a double take when he saw his fiancée in a restaurant with another man. は「彼は、フィアンセが別の男性とレストランにいるのを目撃して、自分の目を疑った」ということである。「死ぬほど驚く」に近いのが jump out of one's skin で、She nearly jumped out of her skin when a strange man put his head through the window! (見知らぬ男が窓から頭を中に入れてのを見て彼女は死ぬほど驚いた)はその例である。「驚いて言葉を失った」ときは Words fail me! という決まり文句がある。このように、「驚き」を表現する際の慣用表現を目的に合わせてネットワーク化しておく、多様な形で驚きの表現をすることが可能となる。これが慣用表現ネットワークの強みである。

4. フローとしての慣用表現

しかし、ストックとしての慣用表現だけでは、慣用表現力を高めるのには十分ではない。そこで必要なのが「フローとしての慣用表現」という考え方である。つまり、自由に言語表現をする際に、慣用表現がどういう役割を果たすかに注目することである。ここでいう役割がはっきりしてくれば、それに応じたトレーニングやエクササイズを組み立てることも可能となるはずである。

Wray (2000) と Wray and Parkins (2000) は、慣用表現の機能に着目した包括的な議論をしている。大きくは、言語処理上の利点とコミュニケーション上の利点に分けられる。言語処理の観点からは、慣用表現は、それ自体が共有されたチャンクであることから、構文を組み立てるといったコストが低い。そして、対人コミュニケーションにおいても、話し手は聞き手が期待するような言語表現を使うことで、やりとりが円滑に進む可能性がある。

筆者は、学習者が英語を使って表現するという観点から、慣用表現には、以下の4つの注目すべき働き(役割)があるように思う。

- ① 慣用表現は効率よく、ある思いを表現するのに最適である(expressive optimization)。
- ② 慣用表現は英語表現の組み立てを容易にする(constructional easiness)。
- ③ 慣用表現は表現の流れを自己調整する働きをする(navigational function)。
- ④ 慣用表現の連鎖がプレゼンテーションだとかチェアリングといったスキルになる(formulaic chaining)。

①は慣用表現の利点として一般に指摘されているものである。ここで、筆者は②と③と④をその効用に加えたい。以下では、それぞれについて簡単に説明していく。

4.1 意図表出の最適表現

まず、慣用表現は思いを言語で表現するのに最適である。これを英語で“expressive optimization”と呼びたい。例えば誰かに何かをしてもらって恐縮した気持ちを表現するのに「どうもすみません。ありがとうございます」という慣用表現を使えば、無難である。つまり、この表現は、相手が話し手の意図を理解する上で一番効率のよい表現であるということである。「どうも」あるいは「どうもすみません」は日常的にそこかしこで耳にする言葉であり、感謝する場面だけでなく謝罪する場面でも使われる。仮にその慣用的な言い方を知らず、「そんなことをしていただく」と心の負担が大きくなり、とても落ち着いた気持ちではいられなくなります」と言えば、意図は通じるかもしれないが(そして文法的にも正しいが)、自然な感じがしないし、場合によっては相手に失礼な印象を与えるかもしれない。同じことがどの言語でもいえる(Lewis, 1993)。

ここで世界共通語としての英語と慣用表現力の関係について簡単にふれておきたい。第二言語としての英語学習における慣用表現の研究は、概ね、英語の母語話者をモデルにしている。これは Lewis (1993), Willis (1990), Wray (2000)らが共通に持つ前提のようである。しかし、英語は、今や、世界共通語として使われている。このことを考慮した上で慣用表現の役割を論じる必要がある。英語が共通語として機能する際のコモン・コアがあるが、それは何であるかという問題が出てくる。世界共通語としての英語には、使用者の文化的色彩が加わり、英語の多様化が進むことは当然である。しかし、英語がどのように使われようと、それが英語である限り、「語彙」と「文法」は共有するであろう。例えば、英語の語彙を最大限に利用するであろうし、過去の事柄を語る際の「過去形」の作り方は英語の文法に従うであろうということである。問題は慣用表現だが、筆者は、提案や依頼を表す慣用表現や感情を表現する慣用表現の多くはコモン・コアに含まれると考える。Could you please ...? は依頼する際に英語母語話者が用いる典型的な慣用表現である。世界中で英語を学び、英語を使う人も、学習過程でこの表現を学び、実際に使うことを選ぶだろうと考えられる。というのは、Could you please ...? が何かを相手にしてほしいときにその意図を伝える最も直接的な表現だからである。確かに、この表現は英語圏で発達した表現だが、コミュニケーションの効率性ということから、世界中の人が共有して使うことが予想される。もちろん慣用表現の中でも、例えば a bolt from the blue といった表現になると、英語圏以外の人に使っても伝わらないということが大いに考えられる。それは a bolt from the blue が文化色の強い表現であり、一般化しにくい表現だからである。

4.2 表現組み立てのための型

次に、慣用表現は言いたいことの「型」を提供するため、英語での表現の組み立てを容易にしてくれるという効果がある。慣用表現自体はどれもが文法的な条件を満たした表現であるが、それは定型化されたチャンクであり、文法を考慮しないで、表現を行う際に容易に使うことができる。これを英語で“constructional easiness”と呼びたい。ちょうど、プレハ

4.3 思考の流れのナビゲーター

慣用表現には、思考の流れを調整するナビゲーターとしての働きがある。これは、そのまま“navigational function”と呼びたい。例えば、何かを言おうとしてその途中に *Yeah, that's it. That's what I want to say.* だとか、*Well, let me clarify my point.* などを差し挟むことで、表現の流れを自分で調整することができるというものである。

他にも *As far as I'm concerned, I have something to tell you, I'm not saying (I don't like the idea), What I'm trying to say is ..., let me put it this way, technically speaking* なども会話の流れを調整するために使う慣用表現に含まれる。一般論を述べたところで、*technically speaking* を差し挟めば、「やかましく言えば、厳密に言えば」という意味になり、話の流れを変える作用がある。また、ある男性について記述していて、*In other words, he's a real go-getter.* (言い換えれば、彼は本物のやり手ということです) のように *in other words* を使うことで先行する話をまとめ上げることができる。つまり、表現の流れを作るフラッグのようなものとして慣用表現は機能するのだといえる。例えば、以下を見てみよう。

My position about the issue is not clear. Well, let me put it this way. I basically agree with Mr. Hall's proposal, but I'm not altogether happy about the details. (その問題に関しての私の立場は明確ではありません。というか、つまり、こういうことです。基本的にはホール氏の提案に賛成ですが、その詳細になると全面的に納得しているわけではないということです)

「ある問題についての自分の立場ははっきりしていない」ということを述べる状況である。*well, let me put it this way* がここでは使われている。この表現を差し挟むことで、次に言うことへの構え(レディネス)ができる。そして、*I basically agree with ...* や *but I'm not altogether (happy about) ...* といった慣用チャンクを使って、言いたいことを表現する流れを読み取ることができる。

4.4 慣用表現連鎖とスキル

慣用表現の力は、慣用表現の連鎖(formulaic chaining)が言語スキルを形成するという視点を採用したときに、実感できる。このことは慣用表現の議論で欠けている点である。プレゼンテーションや会議の司会や交渉は、訓練によって高めることができる技能(スキル)である。実際、ビジネススクールなどでは、そうした技能の習熟を課程目標に掲げることがある。訓練可能であるということは、ある程度の行動予測(例：会議の司会者が行うことの予測)が成り立つということである。そして、ここで注目すべきは、一連の流れでその都度その都度使われる言語表現の多くは慣用化されているという点である。以下では会議の司会を例にして、流れの基本フレームを示し、各々のフレームでどういう慣用表現が使われるかを例示しておきたい。

表現オプション

注意の喚起

Ladies and gentlemen, may I have your attention, please?

会議を始める

I'd like to start the meeting.

Shall we start now?

自己紹介する

Let me introduce myself. I'm ...

I'll chair today's meeting.

会議の目的を述べる

The purpose of today's meeting is to discuss ...

We are here today to talk about ...

The main topic on the agenda for today is ...

要点をくり返す

As I said earlier ...

Let me repeat the main points of our discussion so far.

話題を変える

Can we move on to the next issue?

Do you mind if I change the subject?

元の話題に戻る

To return to our main topic ...

Going back to our first concern ...

誤解を解く

It seems that there has been perhaps a misunderstanding.

Let us clarify some misunderstanding here.

要約する

To summarize, we seem to agree that ...

To recap the main conclusions of our discussion ...

提案に対して反対がないか確認する

Does anyone object to this proposal?

Are there any objections?

質問やコメントを求める

Do you have any questions or comments?

Has anyone got anything further he wishes to say?

会議を閉じる

That's all for today, thank you.

This concludes our business for today.

Our time is almost up.

この一連の基本フレームに沿って慣用表現を使うこと、これが「慣用表現連鎖」ということである。さらに言えば、例えば「話題を変える」というフレームにおいて、*Do you mind if I change the subject?* と相手を立てる表現を選択する場合と、*Time is running out. We have to move on to the next topic.* と理由を述べてストレートに話題変更の必要性を述べる表現を選択する場合があります、いずれを選ぶかは状況によって決まったり、司会者が戦略的に決めたりする。

これまで「依頼する」際には *Could you please ...?* だとか、*I'd appreciate it if you could ...* などの機能慣用表現があり、丁寧さの程度などによってそれぞれ異なるという指摘はよく行われてきたが、慣用表現の連鎖化が言語スキルを構成するという視点は欠けていたように思う。この視点を採用したときに、個別の慣用表現という見方を超えて、慣用表現の連鎖が言語活動の流れの潤滑油になるという見方が生まれる。

5. おわりに

さて、「状況に適切な慣用表現を選択し、使用することができること」というのが慣用表現力の一般的な定義だが、本稿での議論を通して、われわれは、慣用表現力を以下のようにより具体的に定義することができよう。

慣用表現力とは以下の4つを行うことができる力である。

- ① 的確に意図を表現する決まり文句を選択できる。
- ② 慣用表現の型を利用して表現を作り出すことができる。
- ③ 思考の流れと言語活動を調整することができる。
- ④ 慣用表現を連鎖化させて、プレゼンテーションや司会などを行うことができる。

この定義が与えられることによって、学習の目標が明確になるだけでなく、慣用表現力を測定するテストの開発にも方向性が見えてくるはずである。

「提案」「依頼」「拒否」「感謝」などを表す慣用表現に注目した指導は、今ではごく当たり前の営みになっているし、学習参考書でもそれらを取り上げたものは珍しくない。しかし、問題は、単語の意味を学ぶように慣用表現を個別に学んでいっても慣用表現力にはならないということである。学習のポイントは、ストックとしての慣用表現とフローとしての慣用表現に注目すること、そして、慣用表現をストックする際には個別に表現を覚えるのではなく、「慣用表現ネットワーク」として覚えるということ、そして慣用表現をフローとして使用する際には、その機能的役割を自覚することが大事である、とまとめることができる。

参考文献

- Aijmer, K. (1996). *Conversational routines in English*. London: Longman.
- Austin, J. (1962). *How to do things with words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Conklin, K., & Schmitt, N. (2008). Formulaic sequences: Are they processed more quickly than nonformulaic language by native and nonnative speakers? *Applied*

Linguistics, 29, 72-89.

- Ellis, N. (2012). Formulaic language in second language acquisition: Zip and phrasal teddy bear. *Annual Review of Applied Linguistics*, 33, 17-44.
- Jespersen, O. (1933). *Essentials of English grammar*. London: George Allen & Unwin Ltd.
- Jiang, N., & Nebrasova, T. (2007). The processing of formulaic sequences by second language speakers. *Modern Language Journal*, 91, 433-445.
- Lewis, M. (1993). *The lexical approach: The state of ELT and a way forward*. London: Language Teaching Publications.
- Pawley, A., & Syder, F. (1983). Two puzzles for linguistic theory: Nativelike selection and nativelike fluency. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp. 191-226). New York: Longman.
- Riggenbach, H. (1991). Toward an understanding of fluency: A microanalysis of nonnative speaker conversations. *Discourse Processes*, 14, 423-441.
- Schmitt, N. (2004). *Formulaic sequences: Acquisition, processing and use*. London: John Benjamins Publishing Company.
- Taylor, J. R. (2004). Cognitive linguistics and language teaching. *Dokkyo International Review*, 17, 111-137.
- Willis, D. (1990). *The lexical syllabus*. London: Harper Collins.
- Wray, A. (2000). Formulaic sequences in second language teaching: Principle and practice. *Applied Linguistics*, 21, 463-489.
- Wray, A. (2002). *Formulaic language and the lexicon*. London: Cambridge University Press.
- Wray, A., & Parkins, M. (2000). The functions of formulaic language: An integrated approach. *Language and Communication*, 20, 1-28.
- Yorio, C. (1980). Conventionalized language forms and the development of communicative competence. *TESOL Quarterly*, 14, 433-442.